

こころ日記「ぼちぼち」 その③

脇野千恵

不登校生との生活

今も適応教室に来る不登校の子どもたちの支援をしている。

不登校の子どもたちが、学校へ行かなくなった、行けなくなったきっかけは様々だ。友だちとのトラブル、先生との相性が悪い、勉強が嫌い、家庭の事情などなど。

適応教室では、特に指導などはしない。学習も自主的に取り組ませ、無理はさせない。中学生は学校へ行けば校則を守らなくてはならないが、教室へは私服でやって来る。人に見られることを嫌がる子もいて、教室に通っていることを内緒にしている子もいる。

私は心理士ではないので、カウンセリングはしない。ただ教室に来る子どもたちと共に過ごすだけだ。ほとんどの子どもが何らかの「発達障がい」？と診断されてくるのが不思議だが、私は「発達障がい」には関心がないので、その子自身と素で関わるようにしている。場面寡黙な子も、なんとなくコミュニケーションが取れるようになり、ほとんど会話らしいものがなくても、ゲームやスポーツなどで関係が持てるようになっていくのは嬉しい。

どこの高校に入れるの？

以前学校現場にいたから教員の気持ちがよくわかるのだが、学校は不登校生が中学3年生になると進路が迫ってくるので、さすがに心が騒ぐ。不登校生が行ける高校探しが大きな課題となるからだ。とりあえずどこかの高校という組織にあてはめなければ、卒業はさせられない（とは言え、卒業していくが…）。

長い教員生活の中で不登校の生徒を何人も担任してきた。1年、2年のころはなんとなく毎日過ごし、いつか迫ってくる高校受験のことは先延ばしにしている。しかし3年になると、進路保障という言葉が重くのしかかってくる。

不登校生の高校選択は、本当に選択肢が狭くなっていく。その当時はフリースクールも単位制高校もあまりなかったから、入るとすれば、夜間か通信になる。教師が一番気になるのは、出席日数だ。内申に記載しなければならないし、出席が足りないと「副申書」なるものをつけなければならないからだ。そこへは、なぜ不登校になったのか？その理由を、ありもしない嘘を色々並べ書き連ねなければならない。その時の苦痛は忘れられない。

その点今の時代は、フリースクールがたくさんあるし、塾や企業が経営する高校もある。お金さえあれば何らかの高校に入ることができ、ある程度選択肢が広がっている。

色々な進路選択

K代は、受験をして私立の中学校へ行った。地域の公立小学校で、友だちとのトラブルといじめに遭い、地元にはいられなくなったからだ。それなりの進学校だったので、親も喜んだ。ちょっと遠い通学だったが、しばらくは順調に学校生活を送っていた。しかし、そこでも同じような友達とのトラブルがあり、不登校になってしまった。中高一貫の学校だから、不登校になるとそのまま高校への進学は歓迎されない。といって地元の中学校へ戻れないのが辛いところだ。3年生になりようやく適応教室に通い始め、出席日数を稼ぐことになった。親は不登校になっても、私学の高い授業料を払い続けることに不満を持ちなが

ら、じっと何も言わずに適応教室に通わせてた。

いよいよ進路選択が迫ったとき、父母の離婚問題が浮上した。仕方なく母とともに祖母が住む地方へ引っ越すことになった。

全く知らない土地での高校探しは大変だったようだ。自分に向いている高校かを確かめる間もなく、とりあえず合格切符を手に入れ、あっという間に去って行ってしまった。高校へ入ったら、バイトをしてお金を貯めると言っていたが、今は彼女の近況さえわからない。仕方ないとは言え、家族の変化での高校選択で、彼女の人生も大きく変化した。



家を継ぐから…

M介は、中学1年の5月の大型連休明けから、学校へ行けなくなった。運動が好きで、小学校からサッカーのクラブチームにも入っていた。中学でもサッカー部に入り頑張っていた。突然の不登校に、両親はとても悩んだ。何があったのか、尋ねても言わない。息子のかたくなな登校拒否に、ただ見守るしかなかった。

適応教室に来たのは、2年生になってからだ。家から出るにも、近所の人に顔を見られるのを嫌がった。教室に来るまで、パーカーのフードを被ったままだった。

不登校生の中には、中学生になると出席日数をとても気にする子がいる。内申に影響することを知っているからだ。M介もその一人だった。彼は3人兄弟の末っ子。2人の兄はとても優秀だった。家業はお寺。三人の息子たちは、小さい時からその環境に慣れ親しみ、いずれ誰かが後を継がねばならないことを知っていた。

2人の兄達にはなかった不登校。両親は進学のことを気になり、あれこれ策を考える中、適応教室にたどりついた。

寺の仕事はサラリーマンとはかなり違う。父母は日々の寺の行事や信者の対応に追われる毎日だった。末っ子で母親と近かった彼。寡黙な父だったが、毎朝彼を起こし、自動車に乗せて送ってくるようになった。学力も気になるので、夕方からは個人対応の塾にも通わせられた。

彼には夢があった。サッカーの強い高校に入ることだった。どう考えても無理だとわかっているけど、彼は3年生の後半になっても、そのことを熱く語っていた。いよいよ進路選択の時期が近づき、彼の夢は遠のき、入学できそうな単位制高校を選ばざるを得なくなった。

進路が決まってから彼は、「高校は行けなくなってもいい。寺を継ぐから…」

と言った。彼がなぜそう思うようになったのかわからないが、毎日父親と通った日々の中で、時には帰りにラーメンを食べて帰ることもあったようだ。父親との会話は、どんなものだったのだろうと、今にして思う。

高校へ入れればきっと行けるようになるという子が多い。しかし現実には厳しく、行けなくなった子もたくさん見てきた。

とりあえず進学できても、その後の不登校生をサポートしてくれるシステムは、今の社会では充実していない。まして発達障がいと言われた子どもたちは、どこで誰が関わってくれるのか？

適応教室は義務教育の間だけだ。たとえ高校に進学が決まっても、その後のことはわからないし、情報を得ることも難しい。

3年間のコロナ禍で、不登校はさらに増えた。今年3月に卒業を迎える中学生は、コロナ禍で入学し、コロナ対策の中で卒業していく。

つづく